
Untitled.

【 要 】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

序章

人生とはまったくもって儂いものであり、

「今を生きる」とはよく言ったものである。それを痛感したのが今現在、つまり目前に迫る大型自動車との衝突を覚悟したときだった。

天塚御門、享年一六歳。思えば短くも太い人生だったと思う。

小学生時代は純粋だった。“世界最強”という言葉に強烈なまでの憧れを抱き、日夜武術の鍛練に明け暮れていたのだ。中学生になると諸事情により武術をやめたのだが、今度は

「正義のヒーロー」を崇拜した。思春期ゆえのモテる算段を胸臆に潜め、学園内にのさばる“悪”を退治しようと決意、そして難なく完遂した。だが、この策略がうまくいかず、入学早々学園を統一したという噂が出回ることにより、恐怖の対象となってしまうことは言うまでもないだろう。

この頃の俺は前述通り思春期ゆえに欲求が募るばかりで、結局、溜まりに溜まったストレスは不良をこらしめるといふ暴力的な発散方法をとってしまったのだから正義とは言い難い。もちろん結果だけを見れば街の治安が以前より良くなったのは明白だが、そこは俺の善良な心が許さなかったのだろう。不良にさえ気を遣う俺の慈愛に満ちた精神を、誰か素直に称賛してほしいものだ。

……と、まあ、俺って純粋だなあ、と感慨に耽りながら、そんなこんなで無事に中学校を卒業した俺は晴れて高校生となる儀式を行うため、本日明朝、足早に自宅を後にすることにした。

いざこざは絶対に起こさず、超一般的な高校生としてデビューしよう。ああ、これが噂の“高デ”というやつか、などと意気込んでいたわけだが、どういうわけか、登校中に子供が車道の真ん中に佇んでいたのだ。

当たり前前の反応だが、まず俺の脳内を支配したのは“驚愕”の二文字だった。その時点で思考が麻痺していたのか、その後の反応は

とにかく焦ったとしか説明のしようがない。

年の頃は六、七歳くらいの少女だろう。彼女は車道の中央に呆然と立ち止まり、自身の置かれてる立場を全く理解していないであろう表情で、前方からばく進してくる大型自動車を眺めているのである。

その小さな生命の危機的状況を目の当たりにした俺は、気づけば学生鞆を放り捨て、少女の元へと駆けていた。これは一体どういうことなのだろう。やはり俺は先天的な義侠心の持ち主、つまり細胞の一つ一つが正義を求めているに違いない。

そんな冗談を考えながら、ただいま絶賛滑空中の俺は少女の小さな背中を突き飛ばし、高速で迫る巨大な鉄塊の前へと身投げした。素晴らしい自殺行為である。

大型自動車のフレームが視界を埋め尽くしていく中、歩道側を睥睨してみれば少女は無事、安全地帯に身を置いているようだった。綺麗な栗色の髪を大きなリボンで束ね、ピンクのワンピースを着用している。細い足は白く、よく見ればその奥にはクマさんが隠れていた。もちろんパンツだが。

……ああ、どうやら、そろそろ俺の命も終わりのようだ。

もう少し少女の幼いまでも整った顔立ちを拝んでおこうと思ったが、先ほどまでの無音の世界が一変し、今ではアスファルトとタイヤとの摩擦によって生じたけたたましい凶音が耳朵を引っ掻いている。もしかすると今までの思考が走馬灯というやつなのか。興味があったので死ぬ前に体験できてよかったと切に思う。

実際、このような喧騒の中で命を絶つのは少々癪なのだが、少女の幼い生命を守れたならよしとしよう。俺はそういうやつなのだ。

だが、ただ一つ悔いがあるとすれば。悔いがあると、すれば……

視界が暗転した。

結論からいうと、俺は無事、五体満足で生還することができた。だが、その過程というのがこれまた厄介なものであり、己の醜態を晒し羞恥心を煽ることになったことを先に述べておこう。しかし、それを差し引いても少女の太陽のような笑顔を拝めたことは俺にとって無上の幸福であり、己の正義を貫けたことは何よりも誇らしかったのである。

「俺、まだ童貞だああー！」

渾身の雄叫び、周囲からすれば悲痛な叫びにしか聞こえないだろうが、とにかく俺は咆哮した。

だからといって超能力などない俺に現状を打破する力はなく、勇気を振り絞って目蓋を持ち上げることしか出来なかったのだが。

それにしても衝突が遅い、そう思ったとき、俺は奇妙な光景を視界に取り入れることとなった。

「トラックが……ない？」

本来ならばすでに衝突しているはずの大型自動車が、その姿を一片も残さず消していた。

なんとという奇跡。もしか俺には超能力が備わっているのではないか、なんて妄想を一瞬抱いたが、事実はそうではなかったらしい。

左後方から轟音が鳴り響いた。すぐにそれが衝突音だと理解したときには、同時になにが事の原因だということも思い浮かぶ。

大型自動車だ。

俺は豪快に地面へと落下し、数メートル滑ったところで後方へ振り返る。制服が少しばかり磨滅しているが気にしてはいられない。

見たところ負傷者はゼロ。運転手も動揺を表しているものの、運よく活発な動きを見せている。だが、目を見張ったのは大型自動車の側部に走った一本の亀裂だった。注意深くそれを眺め、数瞬の思考後、俺は一つの答えを出した。

「これは……斬撃か？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0571g/>

Untitled.

2011年10月5日18時52分発行